

丁酉^{ていゆう}(ひのととり)の年に丙午^{へいご}(ひのえうま)を思う

校長 久保田範夫

本年度の冬季休業明け集会(平成二十九年一月六日)の中で、私は次のような趣旨の話をした。生徒諸君にとっては二度目になるが、集会で話した内容に、かなり追加・修正をしたこともあり、ここに掲載したい。

こうして生徒諸君と先生方と共に新しい年を迎えることができたこと、文字どおり「有り難く」、大変嬉しく思う。陰暦一月の異称である睦月の由来には、稲の実を初めて水に浸す月で「実月(むつき)」が転じたとする説や、安積の校歌「嫩草萌ゆる」、つまり草木が萌え出る「萌月(もゆつき)」など諸説があるが、親族一同が集い宴をする「睦び月(むつびつき)」の意であるとするものが有力のようである。

平成二十九(2017)年が動き出した。

今年の干支は、34番目の丁酉^{ていゆう}(ひのととり)、昨年は、丙申^{へいしん}(ひのえさる)である。国語の授業で習ったはずだが、簡単にお復習いしよう。干支は、古代中国の五行(木・火・土・金・水)を兄(え)・弟(と)に組み合わせで分けた十干(甲乙丙丁戊己庚辛壬癸)と、時刻と方向を生物に配して示す十二支(子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥)の組み合わせである。最初の甲子^{かつし}(きのえね)から始まり、癸亥^{きがい}(みずのとい)迄の六十通りの組み合わせになる。(因みに、丁酉は私自身の干支でもある。と言うことは、六十通りの組み合わせが一巡りして元の干支に戻る「還暦」ということになるのだが…)。甲子^{かつし}は「甲子園球場」でお馴染みだし、戊辰^{ぼしん}戦争(*)や辛亥^{しんがい}革命(*)も日本史や世界史の授業で学習済みのはず。これ以外にも、「正午、午後」などの時刻や、北東の方角(丑寅^{うしとら})を「鬼門」として忌む日本独自の風習や年中行事等、日本の生活にかなり根付いている。因みに、ウシのような角をはやし、トラの皮の褌をしめた「鬼^{おに}」という妖怪のイ

メージは、この「うしとら」から来ているとも言われる。年中行事についても、二月最初の午うまの日に稲荷神社で祭礼が行われる「初はつ午うま」、五月初めの午うま(端午)の日に行われる「端午の節句」、「ウ」のつく食べ物を食べるとよいとされる「土用(立秋前の十八日間)の丑うしの日」など、定着の度合いは様々だが、陰陽五行説から来る考え方や干支は、日本人の生活の中かなり浸透していると言つてよいだろう。

こうした中、生徒諸君が今後何らかの形で関わらざるを得ない問題として考えてほしいのが、43番目の干支である「丙へい午ご(ひのえうま)」年生まれに関わることである。

丙午年の生まれの女性は気性が激しく夫の命を縮める、という迷信がある。これは、江戸初期の「丙午の年には火事が多い」という迷信が、八百屋お七(*)が丙午の生まれだとされたことから、女性の結婚に関する迷信に変化して広まっていたとされるのだが、この迷信は、日本の社会にかなり大きな影響を及ぼしていると考えられる。

総務省ホームページから採った最近の丙へい午ご(ひのえうま)年生まれの人口データを見てほしい。

○ 乙巳(きのとみ) 昭和40(1965)年生まれ 約182万人

▲ 丙午(ひのえうま) 昭和41(1966)年生まれ 約136万人(前年比マイナス25%の46万人減)

○ 丁未(ひのとひつじ)昭和42(1967)年生まれ 約194万人(前年比 プラス42%の58万人増)

因みに、今年の新成人の人口(平成8年生まれ、平成29年1月1日現在20歳の人口)は123万人で、前年と比べると2万人増加しているが、丙午生まれの人口激減世代をはるかに下回り、急激な少子化は深刻である。男性は63万人、女性60万人、男性が女性より3万人多く、女性100人に対する男性の数(人口性比)は105.8となっている。

生徒諸君は、この数字をどう見るだろうか。因みに、昭和41(1966)年生まれは、安積の期で言うところの97期の一部(昭和41年1月1日～4月1日生まれ)と98期の一部(昭和41年4月2日～12月31日生まれ)に該当する。(97期には、社会の三瓶義元先生へ丙午と体育の有賀久芳先生へ乙巳、98期には、美術の樫村俊智先生へ丙午がいる。)

(*)戊ぼ辰しん戦争(戊辰の内乱)……1968年(戊申の年)、鳥羽・伏見の戦いから翌年の五稜郭の戦いまでの新政府と旧幕府

勢力間の戦争。官軍の東征、江戸開城、最後の長岡城の戦い、奥羽列藩同盟の中心会津若松城攻撃などがあり、1869年五稜郭の戦いで旧幕府軍は降伏。

(*)辛亥^{しんがい}革命……1911年10月10日に勃発した中国の民主主義革命。中国中部の武漢で中国同盟会の影響下にある武昌

新軍が蜂起、軍閥も離反し清朝は崩壊、翌年宣統帝が退位、中華民国（南京）が成立した。

（以上の二項目は、「改訂版日本史⑤用語集（山川出版社）」による）

(*)八百屋お七……寛文八(1668)年?、天和三(1683)年三月二十八日(四月二十四日等諸説あり)

恋人に会いたい一心で放火未遂、火刑に処せらる。井原西鶴「好色五人女」に取上げられた。

昭和41年から遡ること60年前の明治39年(1906)年は、前年より出生数が約4%減少し、生まれた女兒の出生届を前後の年にずらして届け出ることもあったと言われる。この年小説家坂口安吾が生まれ、本名は「丙午^{へいご}」を意味する「炳五」と名付けられ、親類から「お前男に生れてよかったな、女なら悲しい思いをしなければならぬ」と言われたという話を文章にしている(「ヒノエウマの話」初出は「新潟日報」昭和29(1954)年1月3日)。

そして、1906年生まれの女性が結婚適齢期となる大正13年(1924)年頃からは迷信を否定する談話や、丙午生まれを理由に縁談が壊れた女性の自殺の報道などが相次いだという。あの夏目漱石も、明治40(1907)年に発表した小説『虞美人草』の中で、主人公の男を惑わす悪女、藤尾のことを「藤尾は丙午である」と表現しているのである。

先程、「生徒諸君が今後関わらざるを得ない問題」としたのは、次の丙午が何時なのかを考えればわかる。

次の丙午は9年後の2026年であるが、その年、現在の三年生(百三十期生)は、平成10(1998)年4月2日から翌平成11(1999)年4月1日生まれの学年なので、28歳の年に当たる。男女の違いもあるので一概には言えないが、結婚、出産等何らかの形で2026年を意識せざるを得ないだろう。君たちは、迷信として一笑に付すのか否か……。

参考までに、「平成27年版少子化社会対策白書(内閣府)」から引用する。

平均初婚年齢は、平成25(2013)年^①、夫が30.9歳(対前年比0.1歳上昇)、妻が29.3歳(同0.1歳上昇)と上昇傾向を続けており、結婚年齢が高くなる晩婚化が進行している。

昭和55(1980)年には、夫が27.8歳、妻が25.2歳であったので、ほぼ30年間で、夫は3.1歳、妻は4.1歳、平均初婚年齢が上昇していることになる。

ここで、丙午の迷信が、丙午年生まれの世代に、実際に何らかの影響を与えたのか否か、という疑問を持つ生徒諸君もいるだろう。高校生にとって最も身近な「受験」はどうだろうか。前述した本校の樫村教諭からは「入試は楽だった」と聞いている。高校受験、大学受験が他の年より容易だったのかについては当時から論じられていたようであるが、若干古い論文だが、**慶應義塾大学赤林英夫教授の「丙午世代のその後」統計から分かること**」(2007年)が参考になる。(インターネットですぐ検索できる。教授の専攻分野は、教育経済学、家族の経済学、労働経済学、応用計量経済学。)

赤林氏論文からの抜粋。

「**国公立大学への進学率は、1985年において、いっそう大きく上昇している**ことがわかる。国公立大学が平均的に私立大学よりも教育の質が高く、社会的威信も高いとすると、丙午生まれはその点で前後のコーホート(*)を上回っていると考えられる。」(*)コーホート……cohort「統計学」群《同一年齢層など》(広辞苑)

「丙午生まれの子どもが、その前後の年に生まれた子どもと異なる人生を送る理由には、いくつかの可能性がある。当然ながらその**第一は、この迷信によって、特に女性が結婚市場で敬遠されることによる影響**である。これにより、他の条件が一定であれば、女性の結婚確率は低下し、結婚するとしてもその条件(結婚相手の経済的地位等)は相対的に悪いと予想される。結婚確率の減少は、労働市場への参加を上昇させる効果も生む。

第二に、出生率の劇的な低下により、この出生コーホートのサイズがその前後にくらべて小さいことである。これはいくつかの波及効果をもたらす。一つは、大学進学率等の向上により、相対的に高い学歴を得ることができるようになる可能性である。学歴が高ければ、労働市場に対するアタッチメントが高くなったり、結婚相手に対する理想が高くなったりする可能性がある。次に、年齢によって需要の輪切りがされている新卒労働市場においては、サイズの小さいコーホートはその前後に比べ、入職者にとって有利に働く可能性がある。これらの点については男女に基本的に差はないが、その影響は、女性に大きく現れる可能性がある。最後に、結婚市場においても、特定の年齢が結婚相手として好んで求められる場合には、サイズの小さいコーホートにとっては、潜在的結婚相手が相対的に多い。これは、そのコーホートの婚姻確率を高め、結婚後のバーゲニングパワーにプラスに働く可能性がある。

第三は、**迷信が子ども**の**家庭に与える間接的な効果**である。丙午であつてもあえて子どもを欲しいと思う親は、それ

を忌避する親に比べて、迷信にとらわれない、合理的な選択を好んでいた可能性がある。これは、そのような家庭環境を通じて、子どもに特定の影響を与えうる。同時に、偶然に丙午に生まれた女子に対しては、その出生年が将来にわたる人生に不利に働かないように、結婚やキャリアの追求に必要な教育投資を、格別に行っていた可能性もある。」

「丙午生まれに第一子比率が高いことは、人口学者の間でよく知られている(山口(1967)、大谷(1963))。ここでは、『人口動態統計』に基づいてそれを確認する。1966年の第一子比率は50.9%で、この値は、少子化が進んだ最近でも超えられていない、歴史上最高の値である。この値が、どれほど異常な数値であるかがわかるであろう。」

詳細については論文を参照してほしいのだが、その論文の最後に赤林氏は以下のようにコメントしている。

「丙午生まれの家庭背景、教育水準、結婚確率等について、グラフなどを用いて視覚的に確認した。その結果、1966年コーホートの学歴水準が高いこと、結婚確率が男女ともに低いこと、1966年コーホートの女性労働力率が高いこと、などを指摘した。(中略)生年コーホートの識別が正確にできる大規模データがなければ、これらの政策変更の影響を評価することは難しい。社会的に有益な政策評価研究を発展させるために、適切なデータの収集と、研究者間でのデータのいっそうの公開と共有が求められる。」

つまり、この分野については、まだまだ研究の余地があり、所謂「ビッグデータ(Big data)」やスーパーコンピューターを用いた分析・研究が今後進んでいくのではないかと考えられる。

再度問う。生徒諸君は、次の丙午2026年をどうとらえるのか。迷信として一笑に付して合理的選択をするのか、それとも、……。最後に、坂口安吾の前掲書「ヒノエウマの話」を引用してこの稿を終えたい。

「文化はむしろ迷信の母胎であるかも知れない。むしろ優秀なスポーツマンほど迷信的になり易いのは、彼らが進歩につれて己れの弱さや、拙さを熟知するようになるからだ。文化全般に於て同じことで、文化の進歩につれて各人の迷信が、なくなることは考えられない。ヒノエウマの迷信がバカバカしいことは確かであるが、これとても早晩の消滅を期待することは不可能だ。すべて迷信の消滅はこれを期待しない方がよい。そしてただ銘々の教養や勇気や楽天性によって自分がその受難者たることを避けるように心掛けるのが何よりであろう。」